

# 日本語教育ならびに 日本語習得研究におけるSNSの活用

- これまでとこれから -

松下由美子\* · 西花恵子\*\* · 坂本正\*\*\*  
(e-mail : dnrdrnr1130@gmail.com · nishihanak@yahoo.co.jp ·  
tadsaka@gmail.com)

## <目次>

- |                                  |                                  |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1. 日本語教育の世界の急激な縮小                | 3.2. アンケート結果からの考察                |
| 2. SNSのこれまで                      | 4. SNSと日本語教育・日本語習得               |
| 2.1.SNSの活用実態と利用についての研究           | 4.1. SNSと日本語教育                   |
| 2.2.教室活動内における実践研究                | 4.2. SNSと日本語習得に関する研究             |
| 2.3.教室活動外における実践研究                | 5. SNSの課題                        |
| 3. SNSに対する日本語学習者の反応              | 5.1. 学習者のコミュニケーション環境に<br>関する問題   |
| 3.1. アンケート結果から                   | 5.2. インターネット環境と個人情報<br>取扱いに関する問題 |
| 3.1.1. SNS使用に関する質問回答             | 5.3. 教師の負担に関する問題                 |
| 3.1.2.日本語学習におけるSNSに関する質<br>問回答   | 6.考察                             |
| 3.1.3. SNSのコミュニケーションに関する質<br>問回答 |                                  |

キーワード：SNS(Social Networking Service)、日本語教育(Japanese education)、日本語習得研究  
(Japanese acquisition study)、インターネット(Internet)、遠隔授業 (Distance class)

## 1. 日本語教育の世界の急激な縮小

インターネットの急速な普及に伴い、我々の生活は激変しつつある。海外と連絡をとる場

\* 韓南大学、外国人助教授、日本語教育   \*\* 培材大学、助教授、日本語教育

\*\*\* 名古屋外国語大学、教授、日本語教育

合、高額な国際電話を使っていた時代を考えると、今の無料のテレビ電話で地球上、誰とでも簡単に話ができるというのは夢のようなことである。SF映画やアニメの1シーンの中だけの出来事であったのが、日常生活で普通に見られる1シーンになってしまった。インターネットの急速な普及は地球規模で進み、今や多くの国において、インターネット無しで生活する方が難しいぐらいである。

このような時代になり、我々日本語教育者はどれほどこの文明の利器を日本語教育に活用しているのだろうか。1)インターネットを活用した先行研究を整理し、今の状況を把握し、2)日本語学習者のインターネット活用に対する意見、希望をアンケートで分析し、3)日本語教育に貢献する、今後のインターネット活用の方法を模索するのが本稿の目的である。

## 2. SNSのこれまで

### 2.1. SNSの活用実態と利用についての研究

SNS(ソーシャルネットワーキングシステム)の活用の実態や利用に関する研究には村上・岩崎(2008)、高橋(2014)、佐々木(2015)などが挙げられ、教室活動外での学習者の自律的な学習としての実践研究、大学機関内での実践と、大学機関外における実践研究がある。

村上・岩崎(2008)は、日本人学生を対象にしたSNSを大学で活用することの意義を論じ、教職員と学生がアクセスできる学内サイトを使用した実践と教育改善についての報告をしている。サイトを利用して授業評価のアンケートをとることや授業外の教育活動として日本のフランス語学習者とフランスでの日本語学習者とSNS上でお互いの誤用を訂正した学習交流も行っている。課題点としては「多くの学生が、授業評価アンケートの必要性を高く評価した上で、結果の活用に関する課題を多く挙げていた。」(村上・岩崎 2008:14)という調査結果をあげ、課題点として多人数の学生に対し一人の教員のフィードバックが不足してしまう点を指摘している。

教育機関外でのSNSの日本語使用を調査した高橋(2014:41)は、「教育機関に属さない国内外の日本語学習者・使用者を対象とした実践の報告は極めて少ない」と述べ、2013年1月6日から2013年3月末まで調査を行ったものがある。オンライン上に実際のコミュニティ(Facebook)を開設し、アクセスしてきた教育機関に属さない日本語学習者を対象

に使用された日本語の発話数やトピックについての分析を行った。高橋(2014: 52)は「彼らはオンラインコミュニティという文脈の中で相互行為に参加することで、語彙や文法とは異なる「オンライン上で他者とつながるための日本語」を学ぶ機会を得ているのではないか。」と考察しており、それまで日本語を使用する機会のなかった学習者に使用する機会としてのオンラインコミュニティの需要があること、すなわち、SNSの可能性を主張している。

大学内23カ国の留学生のSNSの利用実態を調査した佐々木(2015)は、「web上で個人がシステム内で自分のプロフィールを作成したり、つながりのある他の人のリストを示したり、見たりすることのできるサービスで、他にはできない社会的ネットワークを可能にするもの」(p.15)とSNSを定義づけ、どのような相手にどう利用しているかを調査した。調査の結果、留学生たちは母国の家族や友人だけではなく、日本の友人たちにもLINE、Facebook、Skypeをよく利用していることからコミュニケーションの媒体として使用していることを明らかにした。SNSの利用は留学生たちに人間関係の構築を促進し、留学生教育にも応用できることを述べている。

## 2.2. 教室活動内における実践研究

韓国をはじめとする海外の日本語教育の現場では、会話を学んでいる学生に対して日本人教師の数が絶対的に少ないという問題を抱えてきた。韓国では第二外国語の選択科目として日本語を学習する中学や高校ばかりでなく、専攻として学んでいる大学においても、学習者に対して日本人教師の数が少なく、開講される会話の授業数が少なかったり、1クラスあたりの学習者が20名を超えてしまうケースが多々見られる。このような状況が、日本語で日本人とコミュニケーションをしたいと思う学生たちに、満足のいく授業を行えない原因となり、日本語の会話能力を高められない理由となっていた。

そのような問題の解決方法として、大塚・キム(2008)や杉江(2010)の教室活動内で遠隔授業を行った報告がある。

大塚・キム(2008)は、インターネット画像通話機能を利用した韓国人教師と日本人教師による遠隔チーム・ティーチングを高校の日本語の授業で行い、その問題点の把握と解決、授業方法の確立などに関する調査研究を行った。大塚(2008)によれば、ネイティブ教師が不足している現場で遠隔授業を行ってネイティブから会話や発音の指導を受けられるというメリットは大きいですが、教師1対30名クラスの学習者を指導するには無理があり、対面教育を行う韓国人教師が授業を主導的に行う必要があった。また、回線上の問題で接続

が切断され画像や音声が入切れるという問題も頻繁に起きた。

また、同じく大塚(2008)は韓国外国語大学の大学院生を対象に、SNSを利用した日本語作文授業を行い、韓国での対面授業とSNSを利用した遠隔授業を実施し、問題点を把握し両者を統合した授業の有効性について調査している。それによると、韓国人教師による対面授業と、日本人教師のDaum café(インターネットコミュニティ:インターネット掲示板)を利用した作文の個別指導により、短期間で学習効率が高まるという効果があり、作文のデータベース化が可能になったため、掲示板に投稿された作文を学習者間で討論したり、遠隔指導者が添削したものを閲覧し共有できるというメリットがあった。一方で掲示板に日本語で投稿する際に「日本語フォントの文字化け」が起こることがあった。また、作文を手書きで添削するのに比べて、ワード文書で作業をし、それをネット上にアップするのに時間と労力を有し、教授者が対面授業と遠隔授業のそれぞれに円滑な運営を図るための連絡や調整に時間を有するなどの効率性の問題があることを指摘している。

杉江(2010)は中・高校生を対象に、CALL教室で日本の中国語学習者と中国の日本語学習者を対象に、SNSのチャット機能や掲示板を利用した交流型の授業を行い、授業実践を報告している。授業後のオンラインアンケート結果による授業評価を調査した結果、「教室で教科書を使った授業とは違う、新しい学習方法として役立つと思う」「実際に中国人が使う言葉がわかった」「本当のピュアな中国人中学生と交流ができる」「自分で考えて情報を発信できる」(p.80)が大多数だったことを明らかにしている。

また一方、日本においては日本語教員養成課程を履修している学習者が、実践的な教育の場(教育実習など)を持続的かつ十分に得ることが困難であるという状況がある。

SNSの活用に関し、単なる語学学習のツールではなく、日本人と日本語学習者の協働学習を目的とした実践研究には、上田・中西(2013)、遠海・北川(2014)、岩井・中川(2017)がある。

上田・中西(2013)は、日本の大学で日本語教育を専攻する日本人学生と日本語学習者にとの協働学習をSNSで行った報告をしている。日本人学生には日本語教授法の習得を目的とし、日本語学習者には作文力の向上を目的としている。この研究では、「2回目の2009年度には他の年度には見られなかった「雑談スレッド」が出現」(p.145)しており、雑談によりメンバー間の人間関係の構築への意欲とそれに伴う交流が活発化し、日本語学習者には日本語使用の活発化につながったことを明らかにした。日本語学習者へのインタビューに次のようなものがある。「カジュアルな書き方については勉強になった。わたしは日本人の友達はいないので日本人に対して書く機会はありません。でも、インターネットなど

で読む機会は書く機会に比べてある。相手があつて、書くということは自分は弱いので、特にカジュアルなスタイルを書く練習になった」(p.161)という回答はまさにSNSを利用する利点だと考えられる。

SNSを通し、親しい人間関係を構築することにより、「です・ます体」を使った丁寧表現だけではなく、くだけた日本語表現を実際に使う機会が生じる。特に海外の学習者の場合、実際に日本語を使う機会すらないのが実情である。この学習者はSNSを利用することで日本人との交流だけでなく、なかなか使用する機会のない日本語表現を体得することができたと見えよう。ただし、この研究は3年にわたって調査をしているものの、回毎に日本人学生も日本語学習者もメンバーは違っており、同じ研究対象者に行っておらず縦断的な研究とは言えないが、日本語教育にSNSを活用することの可能性を大いに示唆する結果と言えるのではないだろうか。

遠海・北川(2014)はテレビ会議システムを活用して、日本語教員養成課程の学習者と海外日本語学習者の交流学習を行い、教員養成課程の学習者に教師としての専門性を自ら高める機会を提供している。テレビ会議システムを使ってハワイやタイの日本語学習者と交流会を行い、その後Facebookのグループページに交流内容や感想や相談事項(ジャーナル)などを書き込み、参加者と研究員が情報を共有し、意見交換や助言などを行っている。遠海・北川は、このジャーナルを分析することでこのプロジェクトの有効性(養成課程の学習者にとって主体的に自己研修ができるプロジェクトになっているか)を考察している。

自己研修とは、遠海・北川(2014)では、学習者が数回にわたる海外日本語学習者との交流会を通して、交流を「実践」し、自身のパフォーマンスについてFacebookのグループページにジャーナルを書き込むことで「観察」をし、他の学習者・研究員からのコメントやフィードバック、自分自身の気づきにより「改善」していくという、「実践－観察－改善」というサイクルを行っているか、ということをいう。

この分析から得られた結果は、学習者の自己評価は「行為」に関するものが多く、「意識」に関しては自己評価されにくいこと、また自己評価の内容は肯定的なものよりも否定的なものが多いことなどで、今後とも改善点を加えながら継続してプロジェクトを行っていくのだが交流を行った海外の日本語学習者の反応や学習効果については述べられていない。

岩井・中川(2017)は、韓国と日本の大学の教養科目において日本語学習者と韓国語学習者によるFacebookグループを立ち上げ、交流学習の実践を報告している。15週間の授業期間内に双方の国の学習者が動画を作成し、アップされた動画にコメントを上げるという

内容の交流を行い、授業終了後に質問紙とインタビューを行っている。「個人的に話す機会はなかったため、2回の動画交換だけでは親しくなった感じはしない」「直接話す機会があればよかった」(p.149)など、より頻繁な交流や直接話す機会を求める学習者が多く、テキスト上だけでなく、話すことのできる対話式の授業を求めているという調査結果が出ている。

SNSを活用したものではないが、テレビ会議システムを利用した対話式の遠隔授業を行った実践研究には鄭・諷訪(2011)がある。韓国の大学において、世界7大学の学生を対象に「ステレオタイプとその実際」をテーマにした遠隔授業を行い、その実践をまとめている。この遠隔授業は、「①文化を取り入れた総合的教育」「②多文化教育」「③遠隔教授法の確立」を目的とし、テレビ会議システムを利用する方法や準備、そして授業テーマについての事前学習などを授業中に行っている。2回の遠隔授業にて発表を行った結果、積極的な授業参加と学習動機を誘発することができたこと、言語能力の4技能を総合的に使い、学習することができたという結果が出ている。反面、直接話すことができて高価な機材を購入する必要がある等、実際の利用には負担が大きいものであったと述べ、しかしながら、遠隔授業は日本語学習に効果的なものであると主張しており、実践的検証として大きな結果を得ていると言える。対話式の授業を行う際、SNSの活用の可能性を十分に示唆するものと言えよう。

### 2.3. 教室活動外における実践研究

SNSは学習者の学習のツールとしてだけでなく、日本語習得研究にも活用されている。野崎(2012)は、SNSを1年から3年間利用している日本語学習者3名(学習歴4~5年)を対象に使用しているSNS(Facebook)に対象者の書いた過去と現在の記事内容を比較した習得研究を行った。また、学習者に半構造化インタビューも行い、SNSを利用する過程での学習ストラテジーや学習意欲と動機、日本語の運用能力に変化があるのかを調査した。結果、コミュニケーションの実感を得られたことや、当初は母語で書いていても、3か月後には半数以上の記事に日本語が含まれていた等、日本語で書く意欲が出ていることなどの変化があったことを報告している。結論として、「SNSは、教室での学習と現実世界での言語使用とのギャップを埋める最高の学習フィールドになるのではないだろうか」(p.62)とまとめている。

SNSは、教室内だけの学習活動ではなく、教室から社会をつなぎ、生きた日本語学習が可能になるツールだといえよう。日本人との接触があまりないような海外、特に海外の地方都市のように日本人と触れ合うことのないような学習者にとって、当然の学習ツールとして浸透していくことは間違いない。しかしこれまで利用する場合はテキスト上であることが多く、実

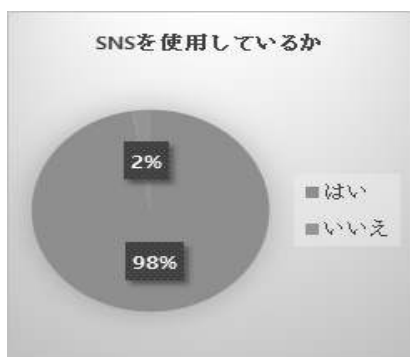
際に対話式でのコミュニケーションを行うような学習は難しいのが現実である。また、対話式が可能であってもパソコンがあるかどうか、コンピュータの知識の有無、インターネット回線の問題などの問題で導入が難しい場合もある。また、対話式の授業を行うためには教師と学習者どちらも事前準備が負担になることもあり、まだまだ浸透していないのが実情である。したがって、SNSを利用した対話式の学習実践等の研究や検証もまだ多くはないと考えられる。

### 3. SNSに対する日本語学習者の反応

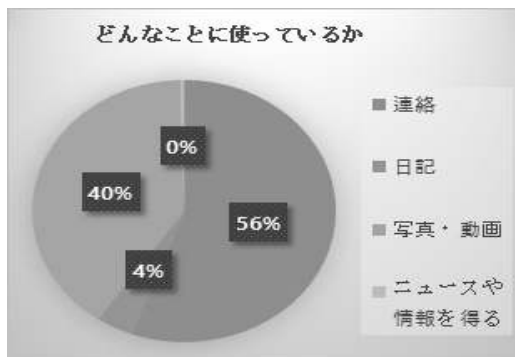
韓国の2つの大学で日本語を学ぶ韓国人日本語学習者にSNSに関する調査を行った。調査時期は、2017年9月下旬で、調査対象者は、A大学92名 B大学68名 合計170名で、1年から4年の大学生である。日本語のレベルは、初級から上級までいる。調査方法は、学習者の母語である韓国語による記述式のアンケート調査を行った。

#### 3.1. アンケート結果から

##### 3.1.1. SNS使用に関する質問回答



〈図1〉 SNSを使用しているか

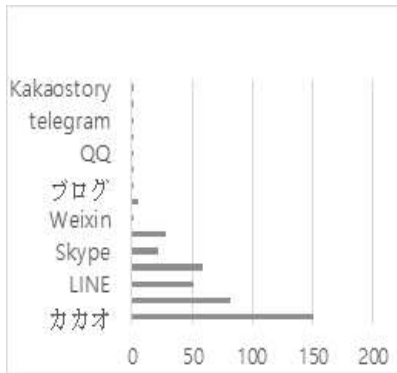


〈図2〉 どんなことに使っているか

普段、SNSを利用しているかという質問に対して、ほとんどの学生が日常的にSNSを使用している〈図1〉(160人中156人)。使用していない理由としては、「時間をもったいないから(2年男子)」「嵌ってしまうと時間を無駄にしまいそうだから(1年女子)」という声があり、いずれもSNSに依存してしまうのではないかと恐れていることがうかがえる。

〈図2〉は、SNSをどんなことに使用しているかの質問である。複数回答であるが、友達

や家族との連絡が最も多く、142人であった。また写真や動画を投稿したり閲覧したりしている学生も全体の3分の2の102人いることが分かった。そして少数ではあるが日記を書いている学生(10人)もいた。



〈図3〉 どのSNS ?



〈図4〉 SNSの使用機器

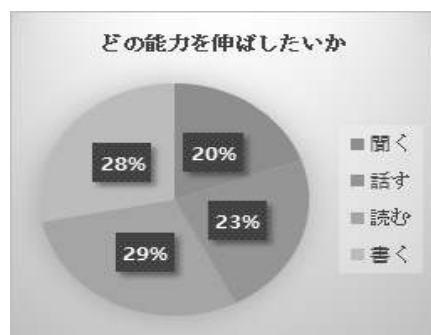
〈図3〉のどのSNSを使用しているかについては、使用者のほとんどがカカオトークを使用していた(156人中151人)。二番目に多かったのはFacebook (図3の下から2番目)、三番目はInstagram (図3の下から4番目)で、LINEを使用している学生も全体の3分の1ほどみられ、多様なSNSを目的に応じて使用していることが分かった。

〈図4〉は、どのような(手段)機器でSNSを使用しているかという質問についての回答である。スマートフォンが最も多く152人で、パソコン(58人)、タブレット(11人)であった。

### 3.1.2. 日本語学習におけるSNSに関する質問回答



〈図5〉 日本語学習にSNSを使用してみたいか



〈図6〉 どの能力を伸ばしたいか

〈図5〉から、全体の80%以上の学生(134人)が使用してみたいと回答した。



### ①使ってみたい理由

「実際に日本人が話している会話を学べるから」「日本語を実生活で使用してみたいから」「実際に経験することが役に立つと思うから」「SNSで実際に若者が使っている言葉を学習したいから」「簡単なコミュニケーションをとってみたいから」「日本人の友達との連絡を通して読み書きの力が伸びると思うから」「日本語の入力方法に慣れることができるから」「現地のいろんな人とコミュニケーションできるから」という実践的な日本語を学びたいという声が多くみられた。

また、「普段よくSNSを使用しているので、自然に上達すると思うから」「IT時代にはコンピューターやスマートフォンを使って活動する機会が多いから」「情報を得やすいから」「気軽に勉強できていつでもどこでもできるから」「友達を作ったり文化についても学んだりできるから」「日本語は上手ではないが、SNSは朝起きてから夜眠るまで一日中しているから」という、SNSの利便性からこれを学習に活用したいと考えている学生も多かった。

さらに「youtubeで日本語の動画を見て勉強しているが、実際に日本人と会話のやり取りをすれば、会話能力が伸びると思うから」「実際に日本人とSNSでコミュニケーションしてみても実力が上がったと感じるから」などすでに日本語学習にSNSを使用し、その効果を実感している学生もみられた。

そして、「SNSを通じて日本人と友達になりたいから」「日本に行かなくても日本人に会えるから」「日本人の友達と交流したい」など、純粋に日本人と交流したいという理由もあった。

一方「教科書よりもスマートフォンに親しみを感じるから」「教科書で勉強するより面白いと思うから」「学校で(授業で)勉強するには限界があるから」という従来の教科書による学習に限界やつまらなさを感じている学生もいた。

### ②SNSを使用したくない理由

「教科書で勉強することに慣れているから」「まだ少し拒否感があるから」「集中することが難しそうだから」「(語学学習は)辞書さえあればいいから」「言語というものは人に会って学ぶものだと思っているから」「カカオトークに飽きてしまったから」「時間がないから」「電子機器を使用すると勉強に集中できないから」というように、従来の教科書を使った学習に慣れていたり、SNSが集中力の妨げになったり、時間の浪費になったりすることを恐れている学生も見られた。

4技能のうちどの力を伸ばしたいか、(複数回答)という質問〈図6〉については自分の苦

手な技能を伸ばしたいと答えている学生が多くみられた。「読む・書く」能力が足りないと感じている学生が多く、特に漢字が難しいと考えている学生が多くみられた。

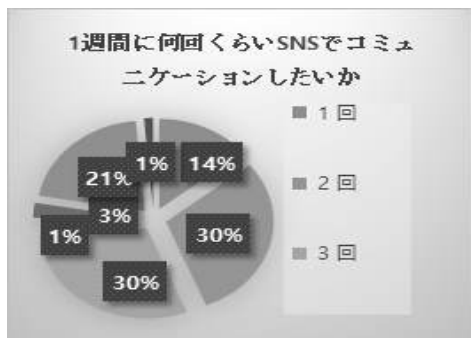
また、「聞く」156人中57人、「話す」156人中67人が、「読む」156人中86人、「書く」156人中82人に比べ少なかつたのは、現在学生たちがよく利用しているSNSカカオトークがメッセージを入力してやり取りができるため、日本人とのコミュニケーションとしてイメージするときにも、メッセージ入力でのやり取りをすることがイメージしやすかつたためと思われる。

そして、音声のやり取りや画像を見ながらのやりとりは、瞬時に聞き取り、返事をしなければならないが、メッセージ入力によるやりとりは、言葉の意味がわからない場合はそれを辞書で調べることができ、自分が伝えたい言葉や表現が日本語でよくわからない場合も、検索をした上で入力ができるというメリットがあるため、日本語によるコミュニケーションの際に文字を入力する方が韓国人学習者にとってはプレッシャーが少ないものと考えられる。

また、日本語学習にSNSを使用したくないと答えていた学生の中に、「日本人とのコミュニケーションとしてはSNSを使用してみたい」という答えも数名みられた。日本語学習ではなく、コミュニケーションのツールとしてSNSを使用することには肯定的な学生もいることがわかつた。

### 3.1.3. SNSのコミュニケーションに関する質問回答

〈図7〉は日本人と1週間に何回SNSでコミュニケーションをしてみたいか（授業内外ということについては無設定）という質問についてであるが、2回から3回と答えた学生が最も多かつた。他の科目の学習や日常生活に支障をきたさず、かつある程度の学習効果を期待するうえでは週に2から3回が妥当と考えているようである。



〈図7〉1週間でコミュニケーションしたい使用回数

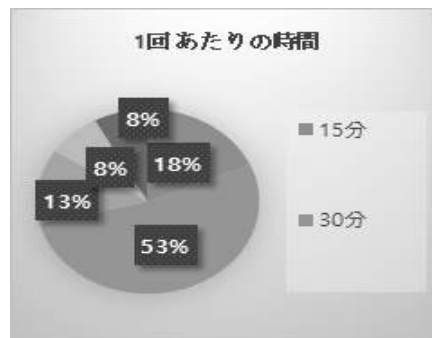


図8〉1回あたりの使用時間

また〈図8〉のように、一回あたりの時間は30分程度が妥当だと考えているようである。

時間については、設問を加える前にアンケートを実施したクラスがあり、すべての学生にできなかった。そのため、また別の機会に質問をする必要がある。



〈図9〉 コミュニケーションしたい人数

〈図9〉より、人数に関しては1対1を望む学生が95人で、グループ活動を望む学生(50人)よりも2倍近くあることがわかった。

1年生や2年生ではグループでのコミュニケーションを望む傾向がみられ、3年生4年生では1対1のコミュニケーションを望む傾向が見られたが、これはまた日本語でのコミュニケーションに自信がない初級学習者はグループでのコミュニケーションをしたいと思い、上級生になって自信がついてくると1対1でのコミュニケーションを望むようになるためと思われる。

### ①1対1でのコミュニケーションを望む理由

1対1のコミュニケーションの利点を挙げる学生の回答としては、

「深い勉強ができそうだから」「個人授業のような感じになるから」「集中できるから」「(日本語の表現がおかしい場合)その場その場でフィードバックしてもらえるから」「お互いのコミュニケーション能力を高められるから」「親くなれるから」「深くコミュニケーションしたいから」「落ち着いて話したいから」「多様な会話ができそうだから」「日常の些細な話もしたいから」など、集中したコミュニケーションや親しい人間関係の構築を求めるものが多くみられた。

グループのコミュニケーションのデメリットを挙げる学生の回答としては、「グループの場合は決まった人ばかりが話すことになるから」「グループでは集中できないから」「たくさんの人達とコミュニケーションするのは恥ずかしいから」「グループでは日本語の実力が向上しないと思うから」という、グループ活動のデメリットを挙げる学生もいた。

## ②グループでコミュニケーションしたい理由

グループでのコミュニケーションの利点を挙げるケース

「たくさんの多様な日本人と交流できるから」「たくさんのやり取りができるから」「一緒にグループになる友達と仲良くなれるし、友達の時間を節約することができるから」「たくさんの人と交流する方が実力が伸びると思うから」というたくさんの人・情報に接したいという理由を挙げている学生が多くみられた。

1対1のコミュニケーションを否定的に考える理由を挙げるケース、

「1対1ではことばに詰まってしまうことがあるから」「1対1は恥ずかしいから(きこちなくなるから)」「1対1は負担を感じるから」という、自信のなさや恥ずかしさを理由に挙げる学生が多かったが、中には「1対1はペアを組むのが難しいから最初はグループがよいが、慣れれば1対1でも良いと思う」というように教室活動の流れを建設的に考えている学生もいた。



〈図10〉年齢



〈図11〉韓国語能力の有無

〈図10〉から、年齢や職業についてはやはり自分と近い年齢の大学生とコミュニケーションしたいという希望が半数、問わないという答えが4分の1程度であり、日本人と友達になりたいと考える学生が多く、年齢や職業にこだわらないという学生も多くみられた。

〈図11〉から、韓国語の能力に関しては3分の1ができるほうが良いと答えているが、3分の2は韓国語の能力に関しては問わないと答えていることがわかった。また韓国語ができないほうが良いと答えた学生の理由としては、「相手が韓国語がわからなければ、日本語を使いたくないから」という答えも見られた。

## 3.2. アンケート結果からの考察

アンケートの結果から見てきたことは、SNSを使用するために十分な環境が整ってお

り、大多数の学生たちが日本語学習や日本人とのコミュニケーションにSNSを活用したいと考えていることがわかった。韓国の大学生たちが望んでいるのは、SNSを使用して自分の日本語能力を高めることであり、日本人が実際に使っている日本語を知りたいということである。そして、単なる語学学習の域を越えて日本人の友達を作ってお互いの文化についての理解を深めたいと考えている。また、時間や場所の制約を受けず、いつでもどこでも気軽にコミュニケーションをしたいとも考えており、スマートフォンを使用して日本人と1対1で1週間に2回から3回ぐらい行ってみたいと考えている学習者が多かった。このような学習者のニーズを満たすためにどのように指導していくべきか、その方法を模索していく必要がある。

## 4. SNSと日本語教育・日本語習得

前節で、多くの日本語学習者がSNSの活用を望んでいることが明らかになったが、SNSはどのように日本語教育、並びに、日本語習得に活用できるのであろうか。

### 4.1. SNSと日本語教育

日本語教育というと教室内の授業という認識が強いが、SNSの出現によって教室の中でも教室の外でも日本語教育の機会が広がったと言える。従来の日本語の授業を考えると、教師が教室で学習者に一人で日本語を教えている姿が浮かぶが、SNSの導入によって、大きく授業形態も変わる可能性が出て来た。例を挙げると、時差のない日本の大学と同じ時間に授業を開講し、パソコンに繋いだモニターを見ながら、日本人と同じテーマで意見を交換したり、日本人学生の発表を聞き、質問したり、逆に韓国の学生が発表して、日本人学生に質問をさせるような活動が教室活動として可能である。しかし、現在は、もっと進んでいて、「スマホ時代」である。スマートフォンを持っていない学生を見つける方がずっと難しいぐらいみんなスマホを持って、日常使用している。このスマートフォンを活用するのである。韓国の学生と日本の学生とをペアにして、会話をしたり、質問をし合ったりできるのである。話し合った内容を自分のクラスで発表したりして、教室でシェアするという展開も容易に可能である。

教室に閉じ込めていた学生を、教室に居ながら教室外に解放し、時空間を超えた授業に持ち込み、楽しく日本語を学習する機会を設けられれば、日本語のモチベーションも上

がり、これまでの日本語教育とは違った展開が期待できよう。

## 4.2. SNSと日本語習得に関する研究

これまでの日本語の習得研究は、実際に学習者と対面して学習者の発話をその場で録音して発話データを収集したり、学習者にあるテーマで作文を書いてもらい、それを作文データとして使用していた。どちらのデータもそのあと文字化してデジタルデータに変換し、保存して、分析するという流れであった。しかし、現在はSNSの活用が可能になって、研究方法も大きく変わる可能性が出て来た。まず、対面といっても、実際に会わなくても相手と会話ができる。パソコンやタブレットやスマホが使える環境にさえすれば、二人が離れていても、どこにいても構わない。Zoomなどを使えば、二人の会話の録音が、また、ビデオ機能を用いれば、録画も可能となるため、非言語コミュニケーションに関する研究も十分可能となる。また、学習者が作文をしている様子を見ている、その場でコメントすることもできる。量的研究ばかりでなく、内的なプロセス変化が窺える質的な研究もSNSの登場で増えていくであろう。

日本語の教育の面においても習得研究の面においても大きく貢献できるSNSの活用を教育者、研究者は考える時期に来ているのではないだろうか。

# 5. SNSの課題

以上、日本語教育におけるSNSの活用について述べてきた。日本語母語話者と接触の少ない海外の学習者には特に利点は多いが、最後に課題点について考察する。

## 5.1. 学習者のコミュニケーション環境に関する問題

日本語に限らず、会話を円滑に行う上で良好な人間関係はとても重要である。しかし、鄭・恩塚(2013)は、教室活動内の遠隔授業においてSNSを利用する場合、授業でいつも会うような相手ではなく、知らない相手とオンライン上で1対1の対話することに戸惑いを感じる学習者も存在すること、初対面の相手へのSNSコミュニティ活動に積極的でない学習者がいたことを指摘している。

前節のアンケート結果の回答にあったように、「自分は言語というものは人と会って学ぶも

のだと考えている。SNSで日本語の勉強をするのはメリットもあると同時にデメリットもあると思うので、自分はSNSを使いたくない。」という学生のように、少数意見ではあるが、SNSを活用する日本語教育に対して抵抗を感じる学生も実際に存在しており、授業として活用する場合は考慮する必要もある。

また、同調査においてSNSを日本語母語話者と学習者の1対1で行うことに対し「会話が多くできる」「細かい質問ができる」等、肯定的である回答が大多数であったが、一部には「一人だとプレッシャーを感じる」「グループのほうがいろいろな表現も学べそうである」という回答や、「日本語母語話者が数人で、こちらが1人ならいい」という回答もあった。日本語教育でSNSを活用する場合、参加人数についても考慮する必要があると思われる。

さらに、授業時間や授業回数が少ない場合、日本語母語話者と学習者の間で十分に良好な人間関係つまりラポール形成が構築できない可能性がある。学習者にとって日本語能力の問題とは別に、緊張感などといった心理的な問題やコミュニケーションへの意欲の問題が生じることがある。その問題を解決するためには、あらかじめ参加者の自己紹介をするなど、事前準備が必要になるかと思われる。普段はできない日本語母語話者との交流が可能であることと、日本語が使えるよい機会だということを、学習者にはあらかじめ説明し、十分理解してもらわなければならないだろう。

## 5.2. インターネット環境と個人情報取扱いに関する問題

教室活動内、活動外ともに利用する場合は、パソコン設備やWiFi等のインターネット環境が安定し整っていることが不可欠である。しかし国や機関によってはそのような環境が整っていない場合がある。その場合はSNSを活用することは難しい。

また、SNSを活用する際、個人情報を登録することもある。参加者の名前、メールアドレスなどがWeb上に表示される場合もあり、個人情報漏洩には細かく配慮しなければならない。Web上にアップされ記録されたものについて相手の許可を得ず外部に持ち出さないよう、参加者はインターネット上でのマナーなども事前に理解しておかなければならない。教室内の管理は教師が行える可能性もあるが教室外で行った場合、個人情報に関する管理が難しいこともある。

習得研究でSNSを使用した際の調査対象者の個人情報の取扱いについても同様である。Web上で保管する際は、コンピュータウイルス感染などにも注意しなければならない。

### 5.3. 教師の負担に関する問題

授業活動でSNSを活用する場合、教師にとっては事前準備が不可欠である。確かに、日本語母語話者と接触する場面がほぼない学習者にとって、簡単な会話だけでもよい経験になるだろう。しかし、前項のコミュニケーションの問題点で述べたとおり、単なる雑談のみで終了し、人間関係が構築されないまま終わる可能性もある。そのため、事前に参加者について把握し、本格的な教室活動の前に自己紹介をしておく等、調整が必要である。活動後、学習者一人一人に対してどう的確なフィードバックを与えるか、活動終了後も参加者同士が交流を続けていけるよう促すことも教師の役割として課題かと思われる。

また、参加者を探す必要があり、SNSで日本語コミュニケーションに興味を持ってくれる日本語母語話者や、学校単位で行う場合には日本語母語話者の学生およびクラスを確保しなければならない。他大学や教師との連携については「遠隔授業でつながる大学間、教師間の協力とコンセンサスがより求められてくる」のような指摘（鄭・恩塚 2013：140）もあり、効率的に遠隔授業を行うためには教師の幅広いネットワークが要求されると思われる。

## 6. 考察

以上、日本語教育と習得研究におけるSNSの活用について考察してきた。SNSについては利点も多いが、以上のように課題点もある。しかし、遠隔的な問題があっても日本語教育にも大きな効果をもたらす可能性があり、日本語習得研究にも活用次第で応用が可能であると言える。SNSを活用した日本語授業の実践報告、並びに、実証的な日本語習得の研究は今後の課題としたい。

### 【参考文献】

- 岩井朝乃・中川正臣(2017)「SNSを利用した日韓交流学習における教師の協働－日本語教育と韓国語教育の連携－」『第31回国際学術大会予稿集』韓国日語教育学会、pp.145-150.  
上田早苗・中西久実子(2013)「ウェブを活用した香港の日本語学習者と日本の日本語教育実習生の協働学習－「雑談」の効果－」『日本学刊』第16号、香港日本語教育学会、pp.145-164.



- 遠海友紀・北川幸子(2014)「テレビ会議システムを活用した海外日本語学習者との交流学習 日本人学生のジャーナルにみる学び」『研究論叢』83号、京都外国語大学国際言語平和研究所、pp.257-272.
- 大塚薫(2008)「SNSを利用した日本語作文授業の試みー対面教育・遠隔教育を統合した授業ー」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第2号、pp.58-72.
- 大塚薫・金才鉉(2008)「日本語母語話者教授参加型 遠隔ティームティーチング授業の試み」『メディア教育研究』第6巻第1号、メディア教育研究学会、pp.116-121.
- 佐々木泰子(2015)「SNSの利用実態から見た留学生のコミュニケーション・プラットフォーム」『人文科学研究』11、お茶の水女子大学、pp.15-25.
- 鄭起泳・諏訪昭宏(2011)「韓日多文化遠隔教育の事例と成果ー韓国における多言語・多文化サイバーコンソーシアムをもとにー」『日本語教育研究』20、韓国日語教育学会、pp.127-142.
- 鄭恵先・恩塚千代(2013)「SNSを利用した相互学習の効果と課題」『日本語教育研究』27、韓国日本語教育学会、pp.177-194.
- 杉江聡子(2010)「NBLT(ネットワーク活用の言語教育)のために中国語学習支援サイトの構築ー日本と中国の高校生間の交流型学習者コミュニティ形成ー」北海道大学大学院平成22年度未公刊修士論文
- 高橋敦(2014)「社会的視点から見た第二言語習得におけるオンラインコミュニティの可能性と管理者の役割ーFacebookを用いた実践からー」『言語教育研究』5、桜美林大学大学院言語教育研究科、pp.41-58.
- 野崎翔子(2012)「SNSを利用した外国語学習についての一考察」『東京女子大学言語文化研究』21、東京女子大学言語文化研究会、pp.49-63
- 村上正行・岩崎千晶(2008)「大学におけるSNSを活用した教育改善の支援」『教育メディア研究』vol.14、NO.2、日本教育メディア学会、pp.11-16.

논문 투고 일자 : 2017. 11. 30
논문 심사 일자 : 2018. 04. 30
게재 확정 일자 : 2018. 05. 09

---

 < 要 旨 >
 

---

## 日本語教育ならびに日本語習得研究におけるSNSの活用

- これまでとこれから -

松下由美子・西花恵子・坂本正

本稿は、日本語教育及び日本語習得研究におけるSNSの活用の可能性と課題を述べたものである。インターネットの急速な普及に伴い、日本語教育の世界も急激な縮小を遂げている。このような背景のもとにSNSに関する先行研究を整理し現状を把握した上で、韓国の大学で日本語を学ぶ学習者のSNSの活用実態と使用意識、日本語学習へのニーズについて記述式のアンケート調査を行った。その結果、日本語学習のためにSNSを使用してみたいかについては80%以上の学習者が「はい」と回答し、日本語母語話者と1対1で、週2～3回、1回30分程度のコミュニケーションをしたいと希望する日本語学習者が多数存在することがわかった。また、SNSは日本語習得研究にも活用できる。SNSによって調査対象者と遠隔対面が可能であり、ZOOM等を使用すればチャット、会話、相手の姿などをすべてが記録可能であるため、会話データ分析だけではなく非言語コミュニケーションに関する研究も十分可能である。さらに、その場でファイルを見ながら同時にコメントもできるため、量的研究ばかりではなく、内的なプロセスも分析できる質的な研究も可能になるであろう。しかし、学習者のニーズを満たすためにどのように指導していくか、日本語母語話者と対面する際の学習者の心理的な負担の軽減、インターネットのマナーや情報漏洩についての徹底厳守、教師のネットワークの必要性等、教師の負担をどのように軽減していくかという点は、今後の課題としたい。

 The Usage of SNS in Japanese Language Education and Japanese  
 Language Acquisition Research

- The present state and the future -

Matsushita, Yumiko · Nishihana, Keiko · Sakamoto, Tadashi

This paper discusses the potential and challenges of using SNS in Japanese language education and Japanese language acquisition research. Along with the rapid spread of Internet usage, the Japanese language education field has been undergoing a rapid retrenchment. Against this background, this paper sets out to review and evaluate past research on SNS as well as to analyze the results of a questionnaire given to Japanese language learners at two Korean Universities concerning their awareness and usage of SNS and how it meets learner's needs. The written questionnaire results show that over 80% of Japanese learners answered "yes" to the question of whether they want to use SNS in their learning. The results also show that a larger number of learners would like the possibility of communicating directly with Japanese speakers two or three times per week, for about thirty minutes each time.

Moreover, SNS can be used in Japanese language acquisition research, allowing for communication with remote subjects. By using ZOOM, not only can messages and conversations be recorded and analyzed, the analysis of non-verbal communication is also possible. Furthermore, SNS can be used not only for quantitative but also qualitative research, since our ability to make comments while viewing a file allows us to analyze internal processes.

However, there are still many questions to consider, including not only how best to meet learners' needs, but also how to reduce the emotional burden of learners when they face native Japanese speakers, how to prevent information disclosure, and the role of teachers' networks. These are all issues that still need to be addressed.